

反ファシズム・エージェンシーの可能性 —ナチス政権成立直前における「共産主義の危険」—

星 乃 治 彦

はじめに

ナチス政権が成立する1933年1月30日直前になっても、ナチを含む右翼系出版物に「共産主義の危険」がしばしば登場する。今から見れば奇異に聞こえる、この時点での「共産主義の危険」の実態を明らかにすることが、ここでの課題である。

結論から言えば、当時の反ファシズム・エージェンシーの行為は、たしかに「共産主義の危険」を実感させるような実態を伴っていた。経営でも、農村でも、最後のナチに対抗するエージェンシー行為が果敢に展開されていたのである。そして、その動きは、社共の市町村レヴェルでの院内共闘を作り出し、労働者の統一に消極的だったドイツ社会民主党（SPD）にも変化を及ぼすようになっていたし、さらにナチ政権が誕生した後でもしばらくは続けられたのであった⁽¹⁾。

ヴァイマル共和制末期の反ファシズム・エージェンシーに関する従来の研究は、その叙述を、7月20日の「プロイセン・クーデター」を最後にしているために、こうしたエージェンシー行為を見落としがちである⁽²⁾。ヴァイマル共和制支持派の重要な拠点を失なったこの事件によって、抵抗の最後の可能性が消滅したとするのである。だが、これでは、その後も引き続き展開される「共産主義の危険」に対するナチの危機感、説明できまい。たしかに、こうした反ファシズム・エージェンシー行為の発掘に熱心に取り組んでいたのは、冷戦期の東ドイツ（DDR）の歴史家たちであったが、反ファシズム国家DDRの正当化に利用するという政治的優先が客観的叙述を困難としていた⁽³⁾。ここでの課題は、1989年以降の新たな史料状況を背景に、反ファシズム・エージェンシー行為の実態に迫ることであり、ナチ阻止の可能性を考察することである。

1. アンティファの展開と「逸脱」

1932年8月、「反ファシズム行動（Antifaschistische Aktion=アンティファ）」を軸とする反ファシズムのエージェンシー行為が相変わらず展開されていた。

街角には、この頃作成された、「殺人はナチの闘争手段／それは緊急令独裁のための、教会のための、企業家のための闘争手段だ／もうナチとファシズムとは手を切ろう／反ファシズム行動へ」というアンティファのステッカーが貼られていた⁽¹⁾。

このアンティファが1932年春からドイツにおける反ファシズム運動の一つの中心であった。KPD自身に言わせれば、「アンティファは、なんら確固とした組織ではなくひとつの運動」であった⁽²⁾。

この構造は、各集会代表者たちからなり呼びかけ人組織的な「統一委員会」と、主にナチの襲撃から自身の生活空間を防衛しようとする「自警団」という実戦部隊の集合体であった⁽³⁾。

そして、1932年夏には、このアンティファを梃子として、「いたるところで雰囲気は、プロレタリアートの統一にとって思いの外良好である」と言われるほど、反ファシズム勢力にとっての雰囲気は好転していた⁽⁴⁾。

このアンティファとの連携の姿勢を見せていた政党は、左派社会民主主義者や右派共産主義者、さらに最大の政治勢力としてはドイツ共産党（KPD）であった。

とくにKPDは、「もしドイツの労働者がアンティファに結集して全力を尽くさないならば、ファシズムは再びたちむかってくるだろう」と、反ファシズム運動の中心にアンティファを据え、その実践に期待を述べるほどであったし⁽⁵⁾、ハンブルクの警察報告書でも、「アンティファは、よく解っていない連中を受け入れる領域となっている。そうなるのは、アンティファが入会費や会費を一切取らないからであり、それゆえアンティファはKPDに向かう前段階になっている。まさにこうした事実からKPDは、アンティファの隊列の中から、良き労働者達を迎え入れなければならなくなっている」と、アンティファのKPDにとっての可能性を論じている⁽⁶⁾。

さらに、こうしたアンティファのエージェンシー行為は、1932年8月9日付で内務大臣に宛てられた警察報告書でも、「共産党はアンティファの中に、現在もっとも転覆活動を成功させるための前提条件を作り出す有効な手段をみており、アンティファの組織化は、既存の国家秩序にとって極めて危険な

存在になりうる」と脅威を感じるまでになっていた⁽⁷⁾。

たしかに、この間アンティファは様々な成果や波紋をもたらすようになっていた。つまり、アンティファは、全国的反ファシズム・エージェンシーの高揚の中で、7月10日には、全国統一委員会を作り出すまでにいたっていたし、プロイセン州でも院内共闘が模索された。コミンテルンは、極東における戦争を背景に、反戦の課題を期待して、こうしたアンティファの動きを容認していた⁽⁸⁾。こうした多様な運動を背景に行われた32年7月の国会選挙では、それまで停滞ないしは後退に苦しんでいた KPD は、一転前進に転じることになった。

そうした模様を見て、右翼防衛団体である鉄兜団は、1932年8月21日付新聞『シュタールヘルム』で、「選挙における成果の大きな部分を占める巧妙に仕組まれた共産党の統一戦線プロパガンダは、さらに広範な層を引き付けはじめている」という危機感をもちした⁽⁹⁾。

ただ、ここで問題としたいのは、むしろその運動の限界の方である。前稿であきらかにしたように、アンティファは KPD に喚起、指導されたものではなく、むしろ、停滞に悩んでいた KPD が、現場で展開されていた反ファシズム運動を取りこもうとするように 路線転換を計ったものであった⁽¹⁰⁾。ただ、運動をそれほど容易にコントロールできるものではなく、反ファシズム運動と KPD との関係は、同じ「反ファシズム」を掲げながらも、それほど単純なものではなかった。

例えば、KPD 中央委員会書記局は、32年7月14日付けで「統一戦線政策—アンティファー婦人とアンティファ」と題する『回状』で「書記局指示」を回しているが、そこでは、「逸脱」を必死に食い止めようとしていたことがうかがえる。

まず、この『回状』の「統一戦線遂行にあたっての誤り」という項目で表明されているのは、「我々の隊列の中でも顕著になった、いかなる犠牲を払っても『統一』をとく、全ての指導部の頭越しに『統一』をといた現状の大衆のムードに対して、我々は精力的に我々の革命的戦略と戦術を大衆の中で主張しなければならぬ」といった統一ムードへの警戒である⁽¹¹⁾。

統一に積極的だったはずの KPD には、こうした警戒感を持つことは奇妙に思えるが、ここで問題となるのは、「統一戦線の結成をスムーズに進めようと、党の正しい戦略や戦術から党自身が離れようとする危険が、いくつかの箇所で見られる。・・・そこではわれわれの指導の問題を棚上げにしている」といった、「党の指導」の問題であった。

この「党の指導」を前提に、『回状』は、集会の持ち方などについて、「党は、SPDとKPDの共同デモの開催について指導部同士の協定は認めない」とか、「同様に容認されていないのは、抽象的にプロレタリアートの統一戦線を討議するようなSPD、社会主義労働者党(SAP)とKPDの共同党員集会開催である」など、具体的な注文を下部組織につけることになる⁽¹²⁾。

『回状』にとって理想的な統一のあり方は、あくまで「下からの」統一戦線であった。つまり、指導部間の事前交渉なしに、たまたまKPDとSPDの労働者が一緒になり、そうした「下」からの圧力で、SPD指導部も仕方なく統一に向かうというものでなければならなかった。

だが、現実にもそうした厳密な規定に沿う運動の展開があったかどうかは疑問である。実際にこの『回状』でも、「デッサウで起こったようなKPDの下級地区指導部がSPDの下級地区指導部と交渉することは絶対に許されない」といった下部の「逸脱」を指摘する箇所は多い。

ただ、ベルリンについては事情が少し違っていた。32年春、KPDが党内には対立をはらみ、選挙でもその停滞が明らかになっていた時、党主流派のウルブリヒトの指導下にあったベルリンで、それまでの方針を覆し、SPDとの集会の共同開催など「上からの」統一戦線を一部認めた新しい運動が始まった。ベルリンは、この「アンティファ」の発祥の地だったのである。したがって、正面から否定しようのないベルリンでの展開は特別扱いされ、それが他の地域に拡大することのないように、『回状』は次のように指示することになる。「今ベルリンでやられているような共同デモをするためにSPDや鉄戦線の他の改良主義的大衆組織に接近しているのは、独自行動を遂行するために我が党がとった革命の成熟度を過大に評価したことに基づく一つの戦術的措置である。・・・ベルリンの措置を図式的に適用することはいかなることがあっても避けなければならない」⁽¹³⁾。

また、KPD党議長テールマン自身が積極的に推進したプロイセン州議会の院内共闘の模索についても、「プロイセン州議会における我が党の議員団の実際の行動は、我が党が州議会でキャスティングボードを握っているということによるもので、ブルジョア陣営内の差異を活用することに役立った。・・・しかし、すでにいくらかの箇所で行っているようにいかなる場合でも『プロイセンの措置』を全ての議会に一般化することは許されない。・・・プロイセンの機械的適用は絶対に許されない。・・・ヘッセン州議会、マグデブルク近郊のショエネベック・・・無条件に社会民主党や「民主的」代表の選出に手をかすことは我らと社会民主党との間の原則的対立をあいまいに

することを意味するのである」として、例外扱いされている⁽¹⁴⁾。

ベルリンへの配慮が目立つ一方で、他の地域については、容赦がなかった。特に、『回状』の中で、「日和見主義の特にひどい例」とされたのは、化学工業の中心工場ロイナであった。

「赤色経営レーテの活動においても我々と SPD との間の原則的対立を曖昧にしようとする傾向がしめされた。日和見主義的態度のとくにひどい例は、1932年7月4日付ハレの『階級闘争』に公表されたロイナ工場の赤色、改良主義的ならびにカトリック系経営レーテの共同呼びかけである。・・・この呼びかけの中では専らパーペン政府とナチ党が攻撃対象にされているが、一言も社会民主党のブリューニング政策への言及はない⁽¹⁵⁾。

その他にも、『回状』では、「鉄戦線の組織に再度手紙を出すことに反対」するとか、SPD系組織に対する「自由主義的評価の出現に全力で立ちむかう」、という苛立ちが見受けられる。ただ、こうした指摘は、むしろ、思うように下部が中央からの指示に従わないという現状を投影したものに過ぎず、多様な展開をはじめたアンティファ運動に、上から枠組みを与えようとする事自体が困難であることを逆説的に示している。

その意味では、7月選挙前デュッセルドルフにおける SPD 系防衛組織国旗団の集会で、国旗団指導者が反ファシズムの呼びかけを発したのに対して、「そうだと、そうしよう。だが、もうあなたが行こうとする道を進もうとはしない、我々は自分たちの道を行く」と SPD 系労働者は言ったとされるが⁽¹⁶⁾、こうした下部労働者の統一志向は、そのまま KPD の下部組織や労働者にも当てはまると考えたほうが、自然であろう⁽¹⁷⁾。

ここでは、西ドイツの KPD 研究の一人者ヴェーバーが叙述しているような一枚岩的な上からの指導に唯々諾々とする KPD 党員ではなく、「逸脱」を恐れない KPD 党員の像が浮上するし、これに対して、KPD の方にしては、除名などの組織的措置はできなかった。イデオロギー的統制は不可能であった⁽¹⁸⁾。そもそも、この『回状』自体が、KPD 党内の保守的な部分の意見を代表しているだけで、KPD 党内に果たして統一した意見が存在したかという疑問さえ許容される。こうした中で、この『回状』は、下部の「逸脱」を必死に牽制しようとしている様だけが伺える文書だった。

こうした「逸脱」よりも、アンティファは、より深刻な問題と本質的な限界を抱えていた。その弱点については、7月に KPD の地区指導部宛てに回された中央委員会組織局からの『回状』でも、次のように指摘されている。

「アンティファがこれまでのところ、防衛的防衛闘争に際して統一委員会

やナチのテロルに対抗する防衛隊の結成という点で進展しているのみであるということ、その際ほとんど居住地域に限られているということ、そして経営労働者のストライキ、失業者や借家人や年金生活者などの物質的要求を求める運動はわずかにとどまっている。・・・全力で即座に訂正しなければならないアンティファの弱点は、これまでに経営労働者と失業者の動員に重点をおくということに成功していないところにある」⁽¹⁹⁾。

では、この弱点に KPD はいかに取り組もうとしていたのだろうか。

2. HIB 運動の行方と「ストライキの波」

相対的安定期において、労働組合内部での反対派活動を進めていた KPD は、ドイツ労働総同盟 (ADGB) への批判を次第に強め、別組織の労働組合を結成しようとする「赤色労働組合主義」をとるようになった。

この期の KPD の労働組合政策を研究したヘール・クライネルトによると、この動きは、1928年11月の金属労働者ストライキで独自の指導部を作って以来現実化し、29年12月には「革命的労働組合反対派 (RGO) 促進のための全国委員会」が設立された。1930年6月以降、独自労働組合結成への傾斜はさらに強まり、1930年10月のベルリン金属労働者ストライキ以降、決定的となった。13万人が参加したヴァイマル末期最大のストライキで独自指導部が成立すると、これを契機に最初の独自労働組合「ベルリン金属労働者統一連盟 (EVMB)」が結成された⁽¹⁾。

つづいて31年1月にルール炭鉱ストライキが始まると、1月11日に「ドイツ鉱山労働者統一連盟」が赤色労働組合として結成され、その後「農業および山林労働者統一連盟」も生まれたのであった。最初の時期、ADGB 組合指導部に対する一般的不満を吸収する形で順調に結成が進むかのように思われた赤色労働組合だが、結局413万の組合員数の ADGB に対して赤色労働組合は32万人程度に止まることが明らかとなった⁽²⁾。

さらに大恐慌の影響が加わり、解雇を恐れる経営労働者が、少なくとも経営内においては、KPD に代表される急進的運動に積極的に参加しようとしなくなると、「経営でも労働組合でも党は後退を食い止めることはできなかった。多くの地区では経営に働く党員の比率が全党員の10%を越えなかった」という事態が生じた⁽³⁾、サラリーマン中央連盟の1932年活動報告書によれば、経営評議会選挙にあたって、「多くの報告書は、共産党や RGO の得票が極端に減少したと報告している」とする始末であった⁽⁴⁾。

こうした行き詰まりを打開するために、31年10月には、KPD 政治局は独自組織の結成ではなく、反対派の活動強化に路線の修正を計り、さらに32年4月25日には、アンティファの呼びかけとともに、ADGB との共同闘争路線へと転換することとなった⁽⁵⁾。つまり、「『インテルナツィオナーレ』誌の5月号の中で、フローリンは中央委員会から委託されて、従来の RGO 政策に反対する最大の批判を行い、最初の修正を行った。そこで RGO の任務とされたのは、1. RGO は統一戦線運動である 2. その活動は改良主義的労働組合の内部で行われるべきである、ということであった」⁽⁶⁾。この路線転換に並行して、RGO 指導者がそれまでのフランツ・ダーレムからフリッツ・シュルテに交替したが、この交替は出版物で公開されることなく、密かに行われた⁽⁷⁾。

こうして赤色労働組合主義に一定の修正が加えられることになり、アンティファが喚起されることになった。だが、そのアンティファは、経営外での運動を中心とするものであり、経営内での活動は弱かった。この弱点は、上に見たように、当事者によってもよく自覚されていた。とくに、7月20日プロイセン・クーデターに有効な反撃ができなかった点が反省され、これを契機に、アンティファは「第2段階」に入ることになった。

「今やアンティファの第2段階に入った。ここでは、資本主義体制の根幹がある場所に全力を集中させることが重要である。・・・アンティファの、第2のより高次の段階で重要なスローガンは『アンティファを経営に持ち込め！』である」⁽⁸⁾。

この運動は、「経営の中へ！(Hinein in Betrieb=HIB)」運動と呼ばれた。ここでは、突出する経営外の運動を、沈滞が続く経営内に持ち込もうとする運動であった。その方針に従って、アンティファは、「適宜出社ないし退社時に集会を開くこと、断固結束した労働者全員が経営で行進すること、勤務時間後駅まで労働者全員が行進するのを組織化すること・・・列車の中にステッカーを！ピラを！」といった具体的な運動を展開するにいたったのである⁽⁹⁾。

ここでは、こうした運動を受け取る側である労働組合の反応をまず問題にしよう。

旧東ドイツ時代に閲覧できた自由ドイツ労働同盟 FDGB の図書館にあった、1932年前後に全国組合大会を開催した各単産の大会議事録を見ても、RGO ないしは KPD に関して言及している箇所は少ない。このこと自体、RGO 運動やアンティファなどの KPD が関与する運動に対して、工場労働

者の関心が薄かったことを実証することになる。数少ない発言の中で労働組合活動家たちが表明するのは、統一志向ではなく、むしろ RGO に対する批判・不信感である。

まず、1931年4月に全国大会を開いているドイツ屋根ふき職人中央連合の大会の様様子を見てみよう。その場では、当時 RGO 路線を邁進していた KPD に対する激しい批判が予測されたので、シュヴェリーンからの代議員であった KPD 党員は、「失業者として最後の救済の術を求めて多くの人々が KPD にやってくる」のであって、労働組合とは関係ない KPD 批判のような政治的議論をしてはならない、と KPD 批判を予め牽制した⁽¹⁰⁾。

そうした牽制が効を奏したたせいか、ドイツ屋根ふき職人中央連合議長は、「我々は KPD 党員だからといって拒んだりはしない。しかし、RGO メンバーだったら、拒む、なぜならば、RGO は我々の組織を破壊しようとする勢力だからである」と弁明している⁽¹¹⁾。

また、別の個所でも、「我々とともに活動していて、一度も喧嘩したことがない多くの KPD 系の仲間たちがいる。だからそういった政治的志向に反対なのではない。我々は KPD 党員と公然と RGO 路線をとる人間とを分けて考えている」と、KPD は許容されるが、RGO は拒絶されるという議長の主張は、一貫していた⁽¹²⁾。

ただ、ヴィースバーデンの代議員が発言しているように、RGO に対する現場での対応は、この議長発言とは違っていた。つまり、彼は組合指導部に批判的な左派に属しながらも、RGO 路線には反対する立場をとっていたが、賃金カットに反対する態度をとったとして、上部機関から RGO メンバーだとされて非難された、としている⁽¹³⁾。組合指導部の批判をそのまま RGO 路線として封じ込める政治的役割を RGO をめぐる言説が果たしたことは否定できまい。

では、アンティファが始動しはじめた32年春に事態は変化しただろうか。結論から言えば、本質的には、否である。例えば、労働組合に批判的で KPD の呼びかけに賛同したドイツ金属労働者連盟のメンバーでさえ、「KPD と RGO があらゆるマジメな闘争において信頼のおける仲間ではないことは歴史が幾度となく証明している。今日こう言っているかと思えば、明日は全く逆のことである。だから、我々は全ての『統一戦線』の提案に大いなる不信感を持たねばならない」と⁽¹⁴⁾、依然として労働組合員の RGO への不信感は根強かった。

32年8月22日から25日までドルトムントで定期大会を開いたドイツ金属労

働者同盟のブランデス議長は、集まった283人の全国代表を前に、「KPDの戦術について一言。この戦術は、今の状況のもとでは、繰り返しハーケンクロイツのやつらに殉教者気取りをさせるのを可能にする。共産党の戦術は反ファシズム戦線を強化する替わりに弱める」と、KPDの反ファシズム運動に批判的で⁽¹⁵⁾、RGOについても、「RGOはたしかにここそこで労働組合に損害を与えることはできたが、自分では何もできない。(その通りだ!)」という発言を繰り返した⁽¹⁶⁾。

ただ、こうしたKPDやRGOへの不信が払拭されないながらも、ナチに対する危機感は着実に増大しており、それが、「制服を着たナチの殺人集団のテロルには、統一し闘争力に燃える組織的闘争意志で労働者階級は対抗する」という発言につながっている⁽¹⁷⁾。

それに、同じ金属労働者でも、下部のライプツィヒの地方組織では、たしかに、1931年までは、「ナチ、RGOそしてわれわれの本来の敵である企業家たちのありとあらゆる攻撃はこれまでわれわれの隊列を崩すことはできなかった」とRGO批判が前面に押し出された報告書がかかれていたが⁽¹⁸⁾、一年後の1932年になると、「われわれが望もうが望まなかりうが、これほどうまくいかなければ、ADGB、鉄戦線、KPDの指導の下に反動の闘争措置に対抗する軸をつくっていく他に解決方法はない。それなしには、一步も前には進まない」と、KPDとの共同に抵抗はなくなっていた⁽¹⁹⁾。変化は着実に進んでいた。

さらに、報告書の分析を続けると、フォークトランドのメーナー (Mehner) という機械植字工指導者は、「ドイツ・プロレタリアートの前進をあきらめようとしなければ、こまごました条件をつけずに統一戦線が結成されなければならない」という認識にまで到達していた⁽²⁰⁾。ただ、こうした意見は少なくとも32年夏の時点では、全体を代表するものではなかった。

こうした労働組合運動レベルにおける深刻な分裂の一方で、政府のデフレ政策は、容赦なかった。とくに、パーペン政府は、1932年9月5日、「就業機会増加・維持のための緊急令」を発した。この緊急令は雇用者数を5-25%増やす場合、資本家側に協約賃金率を10-50%切り下げる権限を与えようとするものであった。倒産の危機にある企業人に対しては20%の賃金切り下げが認められ、1931年の春以来、実質賃金は3分の1減少した。

この緊急令を契機に、1932年秋、「ストライキの波」と呼ばれる1100件に及び一連のストライキがドイツ中で決行された。9月には、ニーダー・シュレージエン金属労働者、ヴェーザー河の近距離運送業者、ザクセンの繊維産

業、マンハイムの家具運送業者、その他バーデン、ヴァッサーカンテ、ニーダーラインの中小企業が相次いでストライキを打ったし、10月には、ハンブルクの市内電車労働者がそれに続いた⁽²¹⁾。

ただ、これをもても分るように、「ストライキの波」の中心は中小企業であって、大企業—労働組合の緊急令に対する反撃はほとんど見られなかった。個々の中小企業におけるストライキの実態に関する研究は進んでいるとはいいがたいが、この1932年秋の一連の「ストライキの波」の象徴的で、ある程度の研究の蓄積をもつ、運動の頂点は、ベルリン交通公社のストライキであった⁽²²⁾。

この経営は、「ストライキの波」に加わった企業のうち、例外的に就業者2万人を超える大経営であった。32年11月2日のストライキ投票の結果、投票者の78%がストライキに賛成したものの、有権者の75%が賛成していないと労働組合はストに反対した⁽²³⁾。

だが、18名からなるストライキ指導部が選出され、ストライキに突入した。そのストライキ指導部は、自由労働組合4名、ナチ系4名と並んで、RGOメンバーも入っていたが、RGOは労働者総数23000名に対して840名しか組織しておらず、大きな影響力をもっていたとはいいがたい⁽²⁴⁾。

4日には、労働者と警官隊との衝突が見られるなど、ストライキ運動が先鋭化するとともに、経営者側は「14時からの労働再開か即刻解雇か」という最後通牒が突きつけられた。結局、ナチ81名、KPD65名の逮捕者が出る程激しい抵抗を伴いながらも、11月7日夕方、ストライキは労働者側の敗北で終わった。

ここには、32年秋の「ストライキの波」の基本的特徴が表れている。それは、ストライキに消極的な労働組合に対して、山猫ストという形をとって労働者たちは抵抗し、それをRGOとナチが支援し、ラディカルな抵抗運動を展開する、という構造である。

たしかに、それ自体としては敗北はしたものの、このベルリン交通公社というシンボリックな大経営でのストライキによって、労働者のエージェンシーに弾みがつく結果となり、警察側はその点を次のように危惧していた。

「下部党員大衆の間で、統一戦線はすでに既成の事実となっており、共産党や社会民主党は急進化していて、ベルリン交通ストライキがそれをさらに刺激する手本となるのではないかという惧れがあるという点も、深刻な問題である。」⁽²⁵⁾

さらに、労働者の抵抗ムードは、このベルリン交通公社ストライキの最中

に行われた、ヴァイマル共和制最後の自由選挙である、32年11月6日の選挙に影響を与えた。「ストライキの波」に批判的なSPDは後退した。ナチは、親労働者路線が、従来の支持者である中間層や資本家側に嫌われ、大きな後退を余儀なくされた。そうした中で、労働者達のエージェンシー・ムードを追い風にしえたのは、KPDであった。

3. 11月選挙と農村・失業者への拡大

この1932年11月6日国会選挙の結果は下表のとおりである。

ここで、1930年9月以来躍進を続けてきたナチはこの11月選挙で初めて敗北した。他方、ナチが最大得票を達成した7月選挙でも、ナチの37.3%に対して、SPDとKPDを合計した得票は35.9%とほぼ同格だったが、それが11月選挙になると、33.1%のナチに対して社共の合計は37.3%と、その力関係を逆転させるにいたった。とくにKPDはこの間に70万票近く前進したのであった。

表 国会選挙における得票数（単位 1000票）

	1930年9月14日	1932年7月31日	1932年11月6日
有効投票数	34970.9(100.0%)	36882.4(100.0)	35471.8(100.0)
NSDAP	6409.6 (18.3%)	13745.8(37.3)	11737.0 (33.1)
SPD	8577.7(24.5%)	7959.7(21.6)	7248.0 (20.4)
KPD	4592.1(13.1%)	5282.6(14.3)	5980.2 (16.9)

: *Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich*, Jg.52 (1933) S.539.

こうしたSPDの減少を取り込む形でのKPDの票の増大を見ると、SPD票がKPDに流れていて、SPDとKPDを合わせた票はほとんど変わらず、その意味で「マルクス主義の選挙民ブロック」があったのではないか、という通説を生んだ。

ただ、最近の研究で、選挙結果の分析を行ったフィッシャーは、このいわば常識に疑問符を投げかけた、「ヴァイマル共和制末期にはマルクス主義の選挙民ブロックがあったのか？」と⁽¹⁾。彼の分析によれば、SPDは、ブルジョア・リベラルから60万票の票を獲得した一方で、140万票のSPD票がナチに流れたとしている。

その上でフィッシャーは、ナチは中産層政党ではなく、労働者にも積極的

に支えられた国民政党政党だったとするファルターの選挙分析結果と⁽²⁾、カナダの社会学者リチャード・ハミルトンが主張する保守的労働者＝「トーリー労働者」の存在を根拠にしながら、SPD労働者は、KPDとよりは、むしろナチとの親近性をもっていた、と論じているのである⁽³⁾。

ここで、問題となるのは、もしも、KPD票がSPDから来なかったとするならば、一体KPD票はどこから来たのだろうか、ということである。この点について、フィッシャーは、KPDの票の増大は、農村地域から供給された、としている。この点で注目すべき内務省史料が、32年12月21日に報告されている「32年7月31日以降中央ライン地区における左翼急進主義諸組織の発展」と題するものである⁽⁴⁾。

そこでは、32年7月選挙までは、地区全体でKPDが伸張していたのに、7月選挙前後から異変が起こったとしている。つまり、「奇妙なことに、この頃から大都市や工業地帯での拡大は後退する一方、農村地帯において顕著な量の勢力拡大を保っている」というのである。そこで、具体的にあげられているのは、以下のような、7月選挙と比較しての11月選挙のKPD票の増減である。

表 中央ライン地区における国会選挙でのKPD票の動向

	32年7月31日国会選挙	11月6日国会選挙	増減
a ケルン市区	90963	91673	+710
b ケルン農村部	14148	14685	+537
c オイスキルヘン	3985	3816	-169
d ベルクハイム	6427	6247	-180
e ジークライス	9656	9832	+176
f ボン市区	6167	7771	+1604
g アーヒェン	18286	17859	-427
h ライン・ベルク圏	7925	9094	+1169
i オーバー・ベルク圏	1978	3904	+1926
j ガイレンキルヒェン	5285	6142	+857
k アールヴァイラー	2447	2702	+255
l アルテンキルヒェン	1949	2176	+227

これ以外にも、この間に新たに結成されたKPD地域党組織58のうち、そのほとんどが農村におけるものであるなど、KPDの農村での伸張傾向は明

らかであり、報告書は結論として、「KPDの期待とは裏腹に、注目すべきはKPDが農村部で勢力を伸ばしていることである」と結論づけている。

なぜ、KPDが農村で勢力を伸ばしているのか、その原因についてこの報告書では、「都市部や工業地帯に対する農村部におけるこの注目すべき勢力拡大は、ここ数年KPDがとくに農村での宣伝活動を集中的にやったことや、益々進行する農民住民の困窮状況に原因が帰せられるのではなからうか」として、たしかに、都市や工業地帯における活動に比べれば、党の方針上での位置付けは控えめだったが、それでも、農村獲得に向けた積極的な姿勢は次のようにかがえる。

「我々がまず第一に獲得を目指さなければならないのは、農業労働者と零細農民・小農民である。・・・生き生きとした委員会をつくるには、実際に居住を訪問しての勤労農民との数えきれない個々の話し合い、とくに彼らの窮状を話し合い、どうやったら彼らを救済できるかを話し合う。溜まり場でのちょっとした集まりを度々開催して、敵対組織のメンバーを個人的に説得し、住所を集め、宣伝材料を絶え間なく流し、闘争要求を列挙し、農村新聞や村落新聞なしはピラで生活の実情を伝えながら、彼らの言葉で大衆化を図り、行動を喚起しなければならない」⁽⁵⁾。

特にKPDは、「農民突撃地域」として農民獲得の重点地域を設けていたが、それは、北西地区、バーデン、中央ないしニーダーライン、ヴェルテンベルク、チューリンゲンであった。その際、KPDの活動の中心は、次のように、都市から農村に向き一軒一軒戸別訪問を通して行われるプロパガンダであり、その宣伝の中心は、ソ連の経済発展の模様であった。

「KPDの側から非常に熱心に進められているのは、農村地域での宣伝である。毎週日曜日になると、宣伝担当者の指導の下に宣伝隊が農村地域へと自転車で派遣され、工業労働者・農業労働者や小農民をその住宅に訪れ、ソ連邦における経済的飛躍や現在注目を浴びているロシアにおける農民の立場を説明しながら、精力的に共産主義的思想のプロパガンダを展開している。こうした宣伝は、農民地域での得票増加に示されているように、成果をあげている」⁽⁶⁾。

こうしたソ連に関する宣伝とならんで、史料に登場するのは、ナチの進入に対する抵抗である。ハンブルク近郊のある菜園農家防衛隊の例がKPDの中央委員会には報告されている。それによると、ある防衛隊員のところに30人のナチ党員が現れ、彼の菜園にもナチの旗を掲げるように要求した。その菜園農家は家に入り、警笛を鳴らすと、1-2分うちに30人の防衛隊員が駆

けつけてナチ党員達と議論になった⁽⁷⁾。

別の農家の話。近くにあった酒場（クナイベ）で農民たちが集会をもった。ところがそのクナイベを、近くにいた突撃隊が包囲した。しかし警鐘が鳴らされると、200人の自警団員が集まり、ナチを逆に取り囲み、武装解除した。2丁の拳銃とその他の武器を没収した⁽⁸⁾。

こうした一連の KPD の農村における積極的な活動が32年末ようやく結実しようとしていた。

さらに、この時期、農村における活動と並んで、もう一つ内務省が注目している KPD の活動の中心があった。

「KPD の宣伝活動は失業者の間でも良い成果をあげている。共産主義者たちによって結成された失業者委員会は失業保険・福祉援助金給付所や職安でも非常に活発なプロパガンダを繰り広げている。共産主義者たちが開く一連の集会はほとんど全て入りが良く、失業者達を方向付けているのは、長期にわたる失業であるし、非常に先の見通しの立たない状況がこうした失業者たちを KPD への接近へと導いているのだろう」⁽⁹⁾。

失業者運動については、組織的体裁をとらないこともあって、まとまった史料や研究はほとんどない。ただ、その中で、当時失業者新聞の編集長を務めていたフンデルトマルクの回想録によると、失業者たちは、一週間に三度スタンプをもらいに、さらに一回は給付金の支給をもらいに、失業保険支給所に赴いた。待ち時間は長く、時間的余裕があったので、失業者新聞が販売され、デモや集会がよく組織されていたという⁽¹⁰⁾。1週間に5-6回、失業者集会は開催されていて、その場で失業者委員会が容易に結成され、委員長も選出されていたらしい。この失業者委員会は、会費を支払う必要もなかったので多くの失業者が参加し、無党派を中心とした超党派機関として機能していた⁽¹¹⁾。

4. ぎりぎりの抵抗と SPD の変化の兆候

農民運動、失業者運動を背景に KPD が前進する中で、院内共闘にしても、プロイセンの院内共闘だけで終わったわけではなかった。1932年末に焦点として浮上してきたのは、ザクセン州の市町村レヴェルにおける院内共闘の模索であった⁽¹⁾。

当地は、1923年に労働者政府という社共政府を経験した。そして、「ザクセンの工業家自身は1923年のツァイクナー（SPD で労働者州政府首相一星

乃)と共産党の実験によって、とくに反応しやすくなっており、当時の経験は今日でもなおドイツ国外でも忘れ去られていない⁽²⁾と、1923年の労働者政府の記憶を共有するのは、何も工業家だけではなからう。

そうした「記憶」が、1932年末、状況の緊迫化と下部の統一への動きの進展の中で蘇生した。つまり、「黨員大衆と下部幹部の間にある統一戦線意志がいかに重要かをSPD自身が指し示しているのである」⁽³⁾と新聞に評論されるように、ザクセン州のSPD選挙作業のための委員会は、1932年11月の市町村議会選挙にあたって、社共共同リストの提出を決議したのであった。

ザクセンでの市町村議会選挙の後に書かれた内務省関係の史料では、事態の推移を次のように分析している。

「予期されていたように、2つのマルクス主義政党は、今や再び下部の黨員大衆の間で注目を浴びようになり実践的に歓迎されている問題、つまり、マルクス主義統一戦線の問題に関して、選挙後立場を表明した。

SPDは、議会で共同しようと、KPDを獲得しようとしている。国会では難しいだろうが、州や市町村、とくにSPDとKPDをたせば、マルクス主義的多数が存在していて、かつSPDが圧倒的な議席を持っているところではよりやりやすいだろう。・・・SPDが統一戦線を論じる際に、いつも必ず言われることは、左派やその支持者大衆に対して、『アリバイ』をつくり、KPDが拒否することを見こうして統一戦線の提案をし、案の定拒否した場合には『反ファシズム統一戦線の破壊』の罪をKPDになすりつけようとしている」⁽⁴⁾。

SPD側はこの共同リストが決して「党の自律性を損うことのない」もので、それは「プロレタリア票の喪失を阻止する」ために必要であり、「プロレタリア勢力結集のための実践的一步」であると積極的にこれを進めようとした⁽⁵⁾。当地のKPD組織も、すぐにこの提案を拒否しなかったものの、「資本主義国家とその機関の権力手段の使用を認めないこと」、「議会外的手段を使った闘争の承認」、「市町村の予算はその地域の大衆集会で採択されること」など9項目にわたる質問を出している⁽⁶⁾。

ここでは、その後実際にどの程度この市町村議会選挙で社共の共闘が実現していたかは定かではない。だが、こうした統一に向けた動きは、選挙後33年1月になって行われたライプツィヒ市の市議会議長選挙をめぐる動きへと引き継がれることになった。ライプツィヒ市議会では、「殺人ファシズムの公然たる代表を市議会議長に据えること」を阻止するとして、KPDは、SPD候補に投票し、第一副議長はKPD候補が第二副議長にはSPD候補

がつくことになった⁽⁷⁾。こうした動きをみて、一般紙『フォッシェ新聞』は、ザクセン州のKPDが、重要な「転換を果たした」としている⁽⁸⁾。

また、ケムニッツでは、ナチがKPD候補と決戦投票になれば勝るとふんで、第一回投票で故意に一部議員がKPD候補者に投票して、決戦投票はナチとKPDの一騎うちとなった。そこで決戦投票でのSPDの出方が注目されたが、SPDがKPD候補者に投票した結果、市議会議長団はKPDに独占されることになったのである⁽⁹⁾。その他にマイセンでも社共は統一候補が擁立した⁽¹⁰⁾。

たしかに、SPDの中央機関誌『前進』は「KPDの動揺？」という見出しを掲げてこの問題を論じたし⁽¹¹⁾、他方、KPD中央機関誌『赤旗』は「SPDのマヌーバーは破綻した」と、中央レベルでの評価は相変わらずだったが、むしろ一般紙『ベルリン日報』は、「KPDの新たな選挙戦略」としてこの変化に注目した⁽¹²⁾。

このザクセン州で院内共闘が模索されていた1933年1月、事態はさらに深刻化して、労働者がナチから殺害される報が続いた⁽¹³⁾。中でも、注目を浴びたのは、リューブックの事件であった。当地では、社会民主党が警察を握っていたものの、ナチ政権が誕生した翌日の1933年1月31日夜、SPD国会議員レーバーがナチに襲撃されナイフで刺され負傷した。その後ナチとこれに反対する勢力の間で衝突があり、1人の国旗団員がナチを殺害したとされて、レーバーとともに逮捕されるということになった。

こうしたSPD系組織メンバーをめぐる事件に対して、ADGBのリューブック地域組織は、KPD地域組織にも共闘申し入れた⁽¹⁴⁾。これを受けてKPD地域組織は、その共闘の条件として、国旗団員の釈放、関係警官の解雇、突撃隊兵舎の閉鎖など7項目を掲げたものの⁽¹⁵⁾、結局は、「労働者の流血が反ファシズム闘争統一を呼びかける」として、無条件で共同行動に踏み切った⁽¹⁶⁾。

同時に、アンティファのリューブック統一会議も15経営から参加して開催され、KPDから5名、SPD4名、国旗団1名、無党派4名からなる統一委員会が選出され、抗議のために、一時間のゼネスト決行を決定した⁽¹⁷⁾。こうした模様を警察は次のように見ていた。

「社共の統一戦線をめぐって新たな政府が成立して以来自然な流れとして、その実現が顕著に現実味を帯びてきている。両党の大衆統一戦線が現実のものとなり、拡大しているばかりか、質的にもより一段高い段階にまでいたっている。たとえば、リューブックにおける一時間にわたるゼネストとか・・

・全体としては実際に統一戦線の見通しは根本的に良くなってきている。それは当面闘うための結集であって、組織的統一は問題外である。・・・もちろん見誤ってならないのは、SPD自身が最近接近への注目すべき兆候を見せていることである。実践的には先に述べたリュベックのゼネストや共産主義者の埋葬の時に公式のSPD代表が出席するということである。・・・さらに、共産主義者たちは、KPD中央の命令に反しているのだが、労働組合の集会で、労働組合幹部の統一戦線アピールに異議をはさまなかったり、『忌むべき兄弟喧嘩の中止』に賛成だと発言している⁽¹⁸⁾。

KPD中央に逆らう地域の共産主義者たちと並んで、ここでも注目されているのは、それまで意識的に統一の流れに距離をとっていたSPDに、作用するようになったことである。

そうしたSPDの統一への動きは、まずは「下」と「左」から始まっていた。まず、『ベルリン株式新聞』は、「赤色統一戦線」のタイトルで、下部SPD労働者の模様を以下のように伝えている。

「赤色統一戦線の発想がいかにSPD青年の陣営の中でも活発かということを示しているのは、ベルリンの『社会民主主義生徒雑誌』の呼びかけである。・・・そこでは、『共産主義者たちが我々と別の道を歩んでいるとしても、我々の目標は同じだ。だから、共和国の統一戦線の闘争を！赤色統一戦線のために全力を！』⁽¹⁹⁾

また、SPD系紙誌の中では左派色の強い『自由な言葉 (Das freie Wort)』は、「階級闘争の状況はプロレタリア大衆の統一を要求している。そのための前提条件は、KPDの合法主義宣言だろうし、社会主義共和国建設作業への積極的参加であろう。これが達せられれば、すぐにでも反ファシズム戦線は活性化し、社会主義は収穫を待つだけの熟した果実となるだろう」と統一への期待を表面化させた⁽²⁰⁾。

ただ、1932年秋になると、こうした下部、左派だけにとどまらず、中央党組織にも、反ファシズム・エージェンシー行為の成果が、次第に反映するようになった。すでに、32年9月14日にはオーストリア社会民主党の党大会に来賓として出席していたSPD幹部パウル・レーベ (Paul Löbe) は、その場で「統一戦線への心からの憧憬」を表明していたし、オーストリア社会民主党のオト・パウアーも、この場で「社会主義労働者インターナショナルと共産主義インターナショナルの直接交渉を提案」することになった⁽²¹⁾。

33年に入ると、SPDの中にも変化が顕著となった。SPD中央機関紙『前進』は、33年2月7日付け『前進』に、編集長シュタンプファーの、

「我々は労働者の統一に関してなんら意見の相違をもっていない。統一を切々と願っていない社会民主黨員などいない」というの発言を掲載するほどになっていた⁽²²⁾。

ただ、それから8日後の2月15日号『前進』には、「先回の選挙の前と同じように、いま再び統一リストについて議論されている。・・・社会民主党とKPD間の統一リストは現状ではまだ百害あって一理なしかもしれない」という記事もあって、KPDとの統一がそう簡単ではないことをうかがわせる⁽²³⁾。

だが、「下」、「左」から沸きあがる統一への希求を見て、『ベルリン株式新聞』などは、1933年3月中旬に予定されていたSPD党大会で、左派指導部が誕生するのではないかと、「レーベ—社会民主党の党首か?」というタイトルで、1933年1月25日の時点で、次のように憶測をめぐらしている。

「この党大会は社会民主党内部により大きな対立を持ち込むだろう。・・・そのことは、すでに党大会に向けた下部組織の代表選出の際に現われている。とくにそこで問題になっているのは、社会民主党が共産党との統一戦線に向かうべきなのか、むしろブルジョア政党と共同して改良主義的道をとるのか、ということである。レーベに指導される党内左翼は従来のブルジョア政党との妥協政策を拒否し、様々な対立にもかかわらず共産党に『プロレタリア統一戦線』のために手をさしのばしている。・・・中間派に位置する党員代表もレーベに投票されることが予想されるので、彼の党首への選出は確実であろう」⁽²⁴⁾。

この評価がどの程度あたっていたかはともかく、一般紙では、「左翼の統一戦線はやってくるのか?大衆の期待増大。指導者の威厳が保たれるかの問題。モスクワは待っている」といった左翼統一のイメージが先行していた⁽²⁵⁾。

ナチ機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』も、33年2月7日パリで、ノルウェー労働者党、イギリス独立労働者党などが、社会主義インターと共産主義インターなど労働者インターナショナル共同会議開催を要求したとしながら、「この会議はファシズムに反対する共同行動計画を作成することになろう」と、統一の動きを敏感に報道していた⁽²⁶⁾。

統一への動きがSPD指導部にまで達していた点を見ると、こうした憶測は全くの妄想ともいえないだろう。

だが、その一方で、32年秋からKPDは、自らが非合法化されるのではないかという可能性をも考えていた。シュレースヴィヒ州内務省からベルリン

の共和国内務省にはいった32年9月8日付け「KPDの武装蜂起準備に関する報告」では、7月31日選挙以降KPDの禁止を察するKPD系組織の会議がつづいているとすでに報告されているし、33年2月7日にピークは、党内出版局会議において、KPDは選挙前にも党の禁止を考慮しなければならない、としたうえで次のように宣言している。「ここで重要なのは、KPDとSPD間の不戦協定については、これを語ることが重要なのではなくて、ファシズムに反対して結集するため、また労働者階級の存続と目標を擁護するために実践的にこの問題を遂行することである」⁽²⁷⁾。つまり、ピークにあつては、KPDの禁止が予感される上での焦りが統一志向を推進したと考えられるのである。

KPDが禁止されるのが先か、統一戦線が結成されるのか、競争であった。ただ、33年2月13日の警察側史料によると、この頃になると、すでに運動の後退が次のように報告されている。「信頼のおける資料からすると、ハンブルクにおいては共産主義的自警団運動が数の上で後退を記しているということが判明した。自警団の一部は崩壊した。・・・大ハンブルクではおよそ5500人を擁する約150の家屋自警団が存在する。そのうちたとえ非合法でも使える人間は2500人である」⁽²⁸⁾。

統一戦線か党の非合法化かという選択肢が開かれていた中で、先手をとったのは、ナチであった。つまり、33年2月28日国会炎上事件を契機に、ナチはKPDを非合法に追いやっていったのであった。

おわりに

反ファシズムのエージェンシー行為は、ナチ政権成立直前でも、その後でもしばらく、街頭で、中小企業を中心とする経営で、農村で、そして議会内でも続いていた。そこにナチは「共産主義の危険」を見たのであった。

このように、反ファシズム勢力は単にナチに呑み込まれていったわけではなく、果敢な抵抗が試みたのであった。その意味で、「こうして反革命は、かろうじて勝利することになる（下線一星乃）」という評価は妥当であろう。

ただ、そこでのエージェンシー行為は、ナチに脅威を与えるほどには強く、それを阻止するには弱かった。では、なぜ及ばなかったのか、という問いは、今、より高次のレベルで、より深刻な問題として、再び提起されるのである。

はじめに

- (1) 拙稿「ドイツにおける反ファシズムのポテンシャル」『熊本県立大学文学部紀要』第8巻第1号17-52頁。
- (2) Winkler, Heinrich, A., *Der lange Weg nach Westen*, Bd.1, München 2000. 中野智世「プロイセン政府とライヒ改革問題」『現代史研究』38 17-38頁。
- (3) この期に関する旧東ドイツの代表的歴史叙述は、*Ernst Thälmann, Eine Biographie, Bde.2*, Berlin 1981.

1

- (1) IfGA ZPA D. Helz VIII/1-2. 私の史料収集は何度かにわたって行われた。とくに、以前のドイツ統一社会主義党、現在の民主的社会主義党の中央党文書館については、1983年、1992年、1993年3度にわたって史料収集にあたった。だが、ドイツ統一後、文書館自身の管轄や名称が変わるなど、状況は大きく変化した。83年の時は Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands, Zentrales Parteiarchiv (IML, ZPA) 92年の時は Institut für Geschichte der Arbeiterbewegung, Zentralparteiarchiv der Partei des Demokratischen Sozialismus (IfGA, ZPA) 開放された文書を見たとし、コミンテルン関係の史料が返還されていた。93年には、Stiftung Archiv Parteien und Massenorganisationen der DDR beim Bundesarchiv, Zentralparteiarchiv der Partei des Demokratischen Sozialismus (SAMPO, ZPA) 確認したところ、史料番号は基本的に変化していないということだが、一部変更された箇所もあるらしい。しかし、それを再チェックするのは今は不可能なので、ここでは収集当時の各々の史料番号を記すこととした。
- (2) IfGA ZPA St 10 (Reichsministerium des Innern) /49 (Einheitsfrontbewegung)/5b/Bl.376-382.
- (3) 拙稿「ドイツにおける反ファシズムのポテンシャル」27-29頁。
- (4) Sturmplan für die Zeit vom 1. Juni bis 1. September, IfGA ZPA St 10/49/5b/Bl.383-7.
- (5) *Rote Post*, vom 12. Aug. 1932, in: IfGA ZPA St 10/49/5b/Bl.361.
- (6) Die Polizeibehörde Hamburg, Abschrift IAN 2166i/13.1.1933, IML ZPA St10/49/Bd.7a (Dez.1932 - Feb.1933) Bl.199.
- (7) IfGA ZPA St 10/49/5b/ Bl. 352.
- (8) 拙稿「ドイツにおける反ファシズムのポテンシャル」23-24頁。
- (9) IfGA ZPA St 10/49/5b/Bl.428.
- (10) 拙稿「ドイツにおける反ファシズムのポテンシャル」
- (11) Rundschreibens Nr.14 des ZK der KPD (Sekretariat) vom 14. Juli 1932,

- IML ZPA St.10 (Reichsministerium des Innern)/50 (Antifaschistische Aktion-Massenselbstschutzformation) Bd.1a (Mai 1932 - Feb.1933) Bl.260.
- (12) *ibid.*.. Bl.263.
- (13) *ibid.*..
- (14) *ibid.*.. Bl.262.
- (15) *ibid.*..
- (16) Sturmplan für die Zeit vom 1. Juni bis 1. September, IfGA ZPA St 10/49/5b/383 - 7.
- (17) たしかに、統一を志向すれば、それまで、「上からの」統一戦線を主張して、KPD からひより見主義とレッテルを貼られて除名された「ドイツ共産党反対派 (KPO)」との区別がつかなくなり、KPD のアイデンティさえ危険にさらすことにもなりかねない。実際に、KPO は、KPD のベルリン・ブランデンブルグ地区指導部へ手紙を送っているが、その中で、「従来 KPD と KPO の間にあった戦術的差異の大半は最近とられた KPD の措置で除去され、残る差異は民主集中制の下で同僚としての討論を通して除去されるだろう」と KPD と KPO の再統一は可能だという見解を取るにいたっているのである。 *Arbeiterpolitik*, Nr.46 vom 25. Juni 1932, in: IML ZPA St10/49/Bd.4a, Bl.55.
- (18) Weber, Hermann, *Die Generallinie, Rundschreiben der Zentralkomitees der KPD an die Bezirke 1929-1933*, Einleitung VII - CXI, Düsseldorf 1981 = *Hauptfeind-Sozialdemokratie, Strategie und Taktik der KPD 1929-33*, Düsseldorf 1982.
- (19) IfGA ZPA St 10/49/5b/388 - 394.

2

- (1) Heer-Kleinert, Lore, *Die Gewerkschaftspolitik der KPD in der Weimarer Republik*, Frankfurt, 1983; Müller, Werner, *Lohnkampf, Massenstreik, Sowjetmacht, Ziele und Grenzen der "Revolutionären Gewerkschafts-Opposition" (RGO) in Deutschland 1928 bis 1933*, Köln 1988.
- (2) 拙稿「ヴァイマル末期ドイツ共産党の党内事情」『熊本県立大学文学部紀要』第 7 巻 - 2 (2001年 3 月) 8-9 頁。
- (3) Wehner, Herbert, *Selbstbesinnung und Selbstkritik*, Köln 1994, S.43.
- (4) Tätigkeitsbericht 1932, Zentralverband der Angestellten, Ortsgruppe Großberlin, S.4.
- (5) *Inprekorr*, Nr. 95 v. 2. Okt. 1931, S.2144 ff.
- (6) Abschrift IAN 2160/13.6.32, Situationsbericht, IML ZPA, St10/49 Bd.2b (Mai1932 - Juni1932) Bl.353.

- (6) Müller, *Lohnkampf*.
- (7) Muller, *Lohnkampf*, S.186.
- (8) Massenappell der Antifaschistischen Aktion vom 24.9.1932, IML ZPA St 10/49 Bd.6 Bl.70.
- (9) IfGA ZPA St10 / 49/ 5b / 391.
- (10) Zentralverband der Dachdecker Deutschlands, *Protokoll vom 17. Verbandstag im Schulheim des Deutschen Bauwerksbundes zu Werlsee vom 7. bis 12. April 1931*. S.474. ただ、このシュヴェリーンのKPD 党員にしても、KPD 中央機関紙『赤旗』は読んでいない。このことは、下部の党員は中央の指令どおりに動いていたのではなく、独自の論理で行動していたとする、マルマンの主張を裏付けるものである。Mallmann, Klaus-Michael, *Kommunisten in der Weimarer Republik, Sozial-geschichte einer revolutionären Bewegung*, Darmstadt 1996; ders., Milieu, Radikalismus und lokale Gesellschaft, Zur Sozialgeschichte des Kommunismus in der Weimarer Republik, in: *Geschichte und Gesellschaft* 21 (1995), S.5 - 31.
- (11) Zentralverband der Dachdecker Deutschlands, *Protokoll vom 17. Verbandstag im Schulheim des Deutschen Bauwerksbundes zu Werlsee vom 7. bis 12. April 1931*, S.448.
- (12) *ibid.*, S.483 - 4.
- (13) *ibid.*, S.477.
- (14) *Wochen-Beilage, für die Mitglieder der Verwaltungsstelle Berlin des DMV*, Jg.8 (1932) - Nr.20 (14. Mai 1932) S.1.
- (15) *20. ordentlicher Verbandstag des Deutschen Metallarbeiterverbandes in Dortmund, abgehalten vom 22. bis 25. August 1932 in der Westfalenhalle in Dortmund*, S.128.
- (16) *ibid.*, S.178.
- (17) Zentralverband der Schuhmacher, *Protokoll über die Verhandlungen des 24. ordentlichen Verbandstages, Abhalten vom 27. Juni bis 1. Juli 1932 in Mainz*, Nürnberg 1932.
- (18) Die Verwaltungsstelle Leipzig des deutschen Metallarbeiter-Verbandes (Hg.), *Geschäftsberichte 1931*, Leipzig 1932, S.2.
- (19) Die Verwaltungsstelle Leipzig des deutschen Metallarbeiter-Verbandes (Hg.), *Geschäftsberichte 1932*, Leipzig 1933, S.2.
- (20) *Jahresbericht 1932 der Maschinensetzer-Vereinigung des Gaus Erzbirger-Vogtland*, S.2.
- (21) Müller, *Lohnkampf*, S.189.

- (22) ナチと KPD の同質性を強調する全体主義理論の影響が強かった旧西ドイツでは、このベルリン交通公社のストライキで、KPD とナチが共闘したことだけをクローズアップしているが、このストライキの経過を見てわかるように、自由労組員もスト指導部に入っていた。Oltmann, Joachim, *Das Paraded Pferd der Totalitarismustheorie, Der Streik der Berliner Verkehrsarbeiter im November 1932*, in: *Blätter für deutsche und internationale Politik*, Jg.27 (1982) - 11 S.1374 ff..
- (23) このストライキの経緯については、Skrzypczak, Henryk, “Revolutionäre” Gewerkschaftspolitik in der Weltwirtschafts - krise, in: *Gewerkschaftliche Monatshefte* Nr.4- 5/1983, S.264 ff.. 原田昌博「ナチス経営細胞組織 (NSBO) のストライキ活動—1932年秋の反パーベン闘争を中心に—」『史学研究』215号 (1997年) 64- 87頁、原田昌博「NSBO のストライキ活動とワイマル期労働争議調停制度 (I)」『安田女子大学紀要』第28号 (2000年) 147- 158頁を参照。
- (24) Müller, *Lohnkampf*, S.191.
- (25) Lagebericht Nr.22 vom 25.11.32., IML ZPA St10 (Reichsministerium des Innern) 49 (Einheitsfrontbewegung) Bd.7a (Dez. 1932- Feb.1933) Bl.102. RGO の指導者シュルテによれば、このベルリン交通公社のストライキを契機に、それまでの中小の経営に限られていたストライキ運動が大企業へも波及するようになった、としている。Schulte, Fritz, RGO im Angriff, Berlin o.J..

3

- (1) Fischer, Conan J., Gab es am Ende der Weimarer Republik einen marxistischen Wählerblock? *Geschichte und Gesellschaft* 21 (1995) S.63- 79.
- (2) Falter, Jürgen, W., *Hitlers Wähler*, München 1991. 柴田敬二「選挙の投票分析からみたナチズムの社会的基盤」『現代史研究』34 (1988年) 41- 58頁。
- (3) 労働者がなぜナチを支持したのかに関しては、ナチス体制初期の「ドイツ労働戦線」を分析したマイの論文 Mai, Gunther, “Warum steht der deutsche Arbeiter zu Hitler?”, *Geschichte und Gesellschaft* 12 (1986) S.212- 234. や井上茂子の論文がある。「ナチ体制に対する女性の支持と関与」『歴史評論』552号 (1996年4月) 77- 87頁。
- (4) Abschrift IAN 2160/3.2. Köln 4. Januar 1933, IML ZPA St.10 (Reichsministerium des Innern) /50 (Antifaschistische Aktion, Massenselbstschutzformation) Bd.1b (Mai 1932- Feb.1933) Bl.551. 当時の農村の状況については、最近の熊野論文がある。「ナチスの農村進出と農民」『法政研究』67- 2 (2000年11月) 389- 429頁。
- (5) Grundform zur Entwicklung der Einheitsfront in Dorfe, IML ZPA

- St.10/49 Bd.6 (Sept.1932 - Nov.1932) Bl.299.
- (6) Abschrift IAN 2160/3.2. Köln 4.Januar 1933, IML ZPA St.10/50 (Anti-faschistische Aktion-Massenselbstschutzformation) Bd.1b (Mai 1932 - Feb.1933) Bl.551.
- (7) IAN 2166c/23.8, Bezirksleitung Wasserkante an Zentralkomitee vom 13. Aug.1932, IML ZPA St.10/50 Bd.1a (Mai 1932 - Feb.1933) Bl.290.
- (8) *ibid.*.
- (9) Abschrift IAN 2160/3.2. Köln 4.Januar 1933, IML ZPA St.10/50 Bd.1b (Mai 1932 - Feb.1933) Bl.551.
- (10) Hundertmark, Willy, Arbeitslosenausschüsse, Arbeitslosenzeitung - die Erfahrungen heute nutzen, in: *Unsere Zeit* (Düsseldorf), Jg.14, Nr.69 vom 24.3.1932, S.7.
- (11) こうした失業者委員会がベルリンでアンティファの統一委員会と共同会議を持ったのは、32年11月20日のことであった。Politische Informationen des Reichsausschusses der Antifaschistische Aktion, IML ZPA St 10/49/Bd.7a (Dez.1932 - Feb.1933) Bl.36.

4

- (1) DDR 時代の地域史研究においては、こうした草の根統一戦線運動に関する研究が蓄積されていた。例えばこの時期のザクセンの動きについては、Kriegenherd, Fritz, *Zum Kampf der KPD in Dresden um die Antifaschistische Aktion in den Jahren 1932/33, Informationsdienst Institut und Museum für Geschichte der Stadt Dresden*, 1 (1968), Sonderheft S.19-36.; *Der Kampf der KPD in Dresden um die Aktionseinheit der Arbeiterklasse gegen die drohende Gefahr des Faschismus und Krieges*, Phil. Diss., Dresden 1961.; Ziegs, Detlef, Evelyn Ziegs, *Positionen der Leipziger Sozialdemokratie zur Einheitsfront zwischen KPD und SPD in den Jahren 1924 bis 1933, Sächsisches Heimatblatt* 25 (1979) -6, S.269-274. ただ、こうした地域独自の展開には、「逸脱」も多く含まれており、DDRの公式的歴史叙述で触れられることは少なかった。
- (2) *Berliner Börsen-Zeitung*, Nr.28 vom 17. Januar 1933.
- (3) *ibid.*.
- (4) *Materialsammlung Betr. Marxismus-Bolschewismus vom 25. Nov. 1932, IML ZPA St10 (Reichsministerium des Innern) 49 (Einheitsfrontbewegung) Bd.6, Bl.431.*
- (5) *Leipziger Volkszeitung*, Nr.224 vom 25, Nov.1932.

- (6) Keine Listenverbindung zwischen KPD und SPD bei den sächsischen Gemeindewahlen, Materialsammlung 19 vom 12. Okt.32., IML ZPA St 10/49/Bd.6, Bl.211.
- (7) *Berliner Börsenzeitung*, Nr.8 vom 1933.
- (8) *Vossische Zeitung* Nr.3 vom 3.Januar 1933, in: IML ZPA St10/49/Bd.7a (Dez.1932 - Feb.1933) Bl.157.
- (9) *Berliner Börsen-Zeitung*, Nr.28 vom 17. Januar 1933.
- (10) Ziegs, Detlef, Evelyn Ziegs, Positionen der Leipziger Sozialdemokratie, S.273.
- (11) *Vorwärts*, Nr.7 vom 5. Januar 1933.
- (12) *Berliner Tageblatt*, Nr.8 vom 5. Januar 1933.
- (13) ベルリンではフリードリヒスフェルデに3人の共産党員が埋葬されるときに SPD系労働者も参列したとされる。*Die Rote Fahne*. Nr.35 vom 10.2.1933.
- (14) *Berliner Börsen-Zeitung*, Nr.65 vom 8. Feb. 1933, in: IML ZPA St.10/49 Bd.7b, Bl. 305.
- (15) *Inprekorr*, Nr.18 vom 10. Feb. 1933.
- (16) Arbeiterblut ruft zur antifaschistischen Kampfeinheit!, in: *Die Rote Fahne*, Nr.33 vom 8. Feb. 1933, IML ZPA St. 10/49 Bd. 7b, Bl.306.
- (17) IML ZPA St.10/49 Bd.8 (Feb.1933 - Dez. 1933) Bl.2.
- (18) IAN 2160 7/LS.4, IML ZPA St.10/49 Bd.7b, Bl.364 - 5.
- (19) *Berliner Börsen Zeitung* Nr.483 vom 14. Okt. 1932.
- (20) IML ZPA St10/49/Bd.6, Bl.215.
- (21) *Berliner Börsen-Zeitung*, Nr.176 vom 14. Nov. 1932, in: IML ZPA St10/49/Bd.6 Bl.365.
- (22) *Vorwärts*, Nr.59 - 63 vom 7.2.1933, in: IML ZPA St.10/49 Bd.7b, Bl.302.
- (23) *Vorwärts*, Nr.77 vom 15. Feb. 1933, in: IML ZPA St.10/49 Bd.7b Bl.378.
- (24) *Berliner Börsen-Zeitung*, Nr.41 vom 25. Januar 1933, in: IML ZPA St10/49 Bd.7a Bl.215.
- (25) *Tägliche Rundschau*, Nr.40 vom 16. Feb.1933, in: IML ZPA St.10/49 Bd.8 (Feb.1933 - Dez.1933) Bl.1.
- (26) *Völkischer Beobachter*, Nr.39, vom 8. Feb.1933, in: IML ZPA St.10/49 Bd.7b, Bl.313.
- (27) *Die Welt am Abend*, Nr. 32 vom 7. Feb. 1933, in: IML ZPA St.10/49 Bd.7b Bl.303.
- (28) IAN 2160 - 7/13.2, Polizeibehörde Hamburg, den 13. Feb.1933, IML ZPA St.10/50Bd.1b (Mai 1932 - Feb.1933) Bl.581.

おわりに

伊集院立「ワイマル共和制からファシズムへの移行」江口朴郎、荒井信一、藤原彰、
『世界史における1930年代』123頁。